

# わが心の自叙伝

## 菅原洋一

.....▷13

「若い日本」を収録した  
アルバム「歌い続けて  
60年 ふり返ればビュ  
ーティフルメモリー〜  
85才の私からあなた  
へ」



売された。

3年前、デビュー60年のとき「85才の私からあなたへ」というアルバムを出したとき、当時の歌声のままのこの歌を復刻CD化したのが、聞いてみて驚いた。確かにはずつとしていて元気で強い。「若い歌」になってはいるが、音大卒業生らしいクラシック、オペラ的な唱法なのだ。今の私とは違った、いい声を張り上げながら歌う歌。またこれも若き日の足跡である。いずれにしてもこの歌で私はレコード歌手になった。いや、なかったのだ。

競争といえ、当時はこの翌年に控えた東京オリンピックの「東京五輪音頭」が街にあふれていた。「ソレ トントントント顔と顔」という古賀メロデーだ。これは三波春夫の歌声でなじみ深い、実はこれも各社競争で発売されていた。三橋美智也、橋幸夫、坂本九、北島三郎と嵐山みどりらがレコード

「ここに幸あり」などの作曲家、飯田三郎先生が曲をつけた。それを各レコード会社が競作して発売されたのである。ビクターでは「歌のおばさん」の安西愛子と三浦洗一、コロムビアは若山彰と真理ヨシコ。ポニージャックスやオペラの伊藤京子などそうとうたる人気スターと並び、私のデビュー曲は発

1963(昭和38)年、初のレコードとなったタンゴのアルバムを聴き、ポリドールレコードの松村恵子という女性「ディレクターが私に「歌謡曲を歌わないか」と誘ってくれた。音大を卒業したタンゴバンドで歌い始めてから、すでに5年の歳月が流れ、私も30歳になっていた。新人というには、いささか、とうは立っていたがうれしい話だった。

当時のテレビで顔が売れていた男性歌手といえば橋幸夫や坂本九、舟木一夫、それに今私が顧問職をつとめる歌手協会の現会長、田辺靖雄らアイドル的な歌手がもてはやされていたが、ここは歌で勝負とばかり張り切った。そんな決して若くない私に回ってきたデビュー曲の題名は皮肉にも(?)「若い日本」という歌だったのである。

### ◆ デビュー曲「若い日本」

NHK、民放各社、新聞社、レコード会社などが協賛し、「私たちの生まれ育った日本を愛するために、誰もが口ずさめる、文字通り国民の歌を作ろう」という提案のもとに制作された歌だった。詞が一般公募され2万数千点の中から、当時、奈良県大和高田市の市職員だった橋本竹茂さんの詞が選ばれ、それに

# 歌謡曲がオペラ的な唱法に

早くコロナが終息し、なんとか今年、五輪が開催されることを願っている。(すがわら・よういち||歌手)